

---

# コイバナ： 「お風呂の話」

成田チカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コイバナ：「お風呂の話」

### 【コード】

N3940K

### 【作者名】

成田チカ

### 【あらすじ】

お風呂と一緒に入りたいですか？ ちよつと大人のコイバナ。今回「お風呂の話」。

どうして男は、一緒にお風呂に入りたがるんだろう。

「いいじゃん、今日くらい。」

「やだ。」

「どーしてー。」

「やだ。」

いつも思うけど、不毛な戦いだ。

彼のことは好きなのに、どうしてもこれだけは好きになれない。

何かというと、彼は私と一緒に風呂に入りたいと常日頃言うてる。

「別に恥ずかしくないじゃん。もうお互いの身体、知ってる仲だし?。」

「つかー。恥ずかしいこと言わないでよ!。」

「何がそんなにいけないのさ。」

「お風呂は私のものなの!。」

「何だよ、それ。わっかんないな〜」

わからないならもう言うな! って言いたくなるんだけど、そこはグツと我慢。

別に、男とお風呂に入ったことがないわけじゃない。でも、2人で一緒に入るなんて行為は超だだっ広いお風呂を持ったセレブがすればいい話で、庶民の風呂でするものじゃない。

大体、あんなにガタイのでかい男と一緒に入ったら「狭い」、「窮屈」、「リラックスできない」の三重苦だ。

私はお風呂の時間が好きだ。お風呂の中でぼーっとしたり、本を読んだり、足を自分でマッサージしたりするのが私の至福の時だったりする。私はそれをいかに彼氏といえど、邪魔されたくないだけ

なのだ。

だから、無理だろうと踏まえた上で、言ってしまった。「もっと大きいお風呂だったらね」って…。

まさかその後、彼が近所の商店街の福引で温泉旅行を見事引き当てるとは思いもしなかった。大体、生まれつきくじ運の悪い私に、ティッシュ以外の何かが当たるなんて事を予測させる方が無理だ。その週末、私たちは温泉地へと向かっていた。

「この旅館、家族風呂があるっていうからさ。これでやっと」一緒にお風呂』が実現だね！」

「…信じられない。」

すっかり上機嫌な彼と、まだ実感の沸かない私。

私の中の天使は「久しぶりの温泉ですもの。たーっくさん楽しまない」となんてウキウキしてるけど、私の中の悪魔は「ここで一緒にお風呂に入ったが最後。あなたのハッピーバスタイムは終わりですぜ。けっけっけっ」と笑っている。

「まあ、温泉だしね。」

楽しもう、かな。えーっと。と、思っているうちに私たちは温泉旅館に到着した。

当然のことながら、到着してまず彼は家族風呂とやらの予約を済ませ、それを基準に全ての予定を組んでいった。何たる執念だろう。もう、何が彼をそこまで突き動かしているのか、私にはさっぱり理解できなかった。

家族風呂はさすがにうちのお風呂よりも大分広かった。

「これなら、満足？」

彼は嬉しそうだ。

私は彼から何が繰り出されるのか警戒しながら身体を軽く洗って湯船に入った。

「はあ。気持ちいい。」

つい口から漏れた言葉に、彼が顔を緩めた。

彼と私はそのまましばらく、何となく向かい合ったまま、黙って湯船につかっていた。

「…あのさ。」

彼が近付いてきて、私は彼に抱き寄せられた。ふわっと身体がお湯に浮いて、お湯を少し湯船から押し出した。彼は私の肩に顎を乗せると、深呼吸をした。

「ふう。」

「な、何よ。」

「ううん。こうするの、夢だったんだよねえ…。」

「は？」

「こうやって、お風呂でのんびり抱っこするの、やってみたかったんだ。」

「あ…。そう、だったんだ…。」

…私のバカ。何を想像してたんだか。

「君って、いつも幸せそうにお風呂に入ってるでしょう？だから、僕も一緒に入りたかったんだ。」

「『いつも』って…。居間で待ってると思ってたら、覗いてたんかい。」

「あ…。」

彼が気まずそうに顔を背けた。そりゃあ、気まずいでしょうよ。でも、とりあえず許してあげることにした。何だか、彼の可愛い一面を見ることが出来たような気もするし。

私は彼の顔を両手で支えると、そつと彼にキスをした。湯気のお陰でプルプルになった唇が気持ちいい。

「今度から、たまに2人で一緒に入ってもいいよ。」

「本当に？」

「うん。でも、『たまに』だよ？ うちのお風呂、狭いから。」

私は初めて、2人で入るお風呂も悪くないなと思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3940k/>

---

コイバナ： 「お風呂の話」

2010年10月11日12時31分発行